俳諧雪とすみ

863
133

国立国会図書館　タイトル『俳諧雪とすみ』 請求記号 863-133

ガラス使用

863-133

寶井與可句を練て誹を
泉子文字を作る事は他の類
可あらはめの告の雅にしてま
後か益人を侍らしめられ栗
斎始として天和より元禄乃
須まであまたのてから一様
ならぬこゝ稿を窺ふものゝ雅
世にはさし辛させ給ふものも

和露文庫

渡邊梅所藏書

国立国会図書館　タイトル『俳諧雪とすみ』　請求記号 863-133

ガラス使用

文ゝ需て文ゝぬとこゝほ有らく
俳諧の道の書あまたなる
なかにも此者はかくれなき
鈴やこゝにその定雅子は
ほとゝきすの風雅の術にすぐれ
家にてひとつの集を撰みて
世にひろめ玉ふ歌僧のこゝろなる
その筆たかきはさ程まれなる

かぎりあんとても何にかゝる
古人もあまりぬ縁のこゝを
崇めるをはしおくさあらぬ
その線眼の前に書のつらく悦
さくて一のこゝろにしき書は
果しのなけらいつまりむと
あるのはあはれきつめらしきかく
みちの家あき秋なる冊し

けふをかぎれ叢のこゝろをしらせむ
着やうれるく聞て卯しのこと〳〵
ましよりけ寝くをめあらめなるや
俳仙堂下にてかく述

文政三年九月朔

月居

自序

大和うたハ代々に風調あり唐う
たもまたかくのことし俳諧にも代々に
風義ありて流行あり支流もなき中
にも蕉門の一派大ゐなるをもとゝは
まといつもちられ又一調をなしたるに
大和貞享元禄をもしくおもかけあ

且て翁を天和のはじめいまだ檀林に
風俗まて貞享の末や正流の体を
しるを宗きすつまきつのかたいふも
貞享の古流も和のはしめていさゝか巧
言曲節の句作をそへ侍りぬ之録に
いるわて正風を越しし思ひ躰なき
道をきいえんまし目をえ録まて正

三十三

風姑に越うはらてのたまつきさん集
いふ所をかく風調おもしろき時八
すゝひ翁の遺書をかうゝ挂す社
風調きわうちて独きわさまにうた
侍りぬわくいふ所古人の句みうち
ものを似たるをおもすすまぬ意越
ち理ひを傳へておのゝ風流となし

四

国立国会図書館　タイトル『俳諧雪とすみ』　請求記号 863-133

ガラス使用

て趣ある無き事よ有雙にいつれも
古人の句ばかり造るにはあらず古人
の聞まゝのたくみを我ぬきぬとなる
からの詞にまさるものなれば
其外ならず年を軽ていふ事

俳仙堂
定雅

京都寺町 菊屋太兵衛

ウ

俳諧雪とすみ

梅里
維石 著

虚栗は風調に倣ふ

雲花と化して黒きは炅（タベ）は之郭

天まロなし 筆の声 山川

鶴の首に承む丈は巻栽えく

新範鈔を加るは仙術

有の樹（ハミ）まほろし乃背に攀（チ）ぬらん

眼むらきし 唐荻乃芬

此集處はよく作るの志てるを陀ニ
魚を機にして鰐を釣る
丈夫弓不惜銭に顳顬射
天下をとれハ儀の琴且
山狼を吐て雷鼓夕ゝとならなしぬ
気は霹て闘怨の詩
男は美女より拙ク
情は友有琴は弦なし

傀儡鏡を見て月は露に骨枯まし
蝕ハ羅羅を哭
いとゆふの文は夷は闌ちらえく
鳩の屋の蛄ハ足揺子木
蚊の亨腹痛を療こ手段
藻髪ハ雲を乱樹を
草を喰気は嘴角の老眠よ
有四角にもなくらんぞや

荘子カ曰五石の瓢ハ忍と哀
菌を欺(アサムク)妓女カ樺(イチクン)
星の命も小吹郎か脊を笑て
つれし宛し芸妻のなき本
深雪(ミユキ)姫(ヒメ)白讃カ梅紙きむらん
佛の玉ワ生ハ尸
清む流ル枝の鄭カ永める
蒹游ゑく舟を呑音

懸巫女(ミコ)秀句ハ法師俳諧も良
貸の檢(ナラク)流れよ志はせし三味線
日を末(ヒツシ)二院カ砥文麻寥(タリ)
獨講の翁楚眠承夢
法の泉時よ覧あと風なけく流し
春ゑくゑらく鯵(ムツアジ)カ臭

○
冬なり、
猶さまさまく幽情を催ほさ
雨は山家をあれて猶ほつゝき
春の色にむせぶ吉野家
陀も寝覚めのうら雪見かつけて
鄙乃清気に操む脈ホ
身は席(ムシロ)笛の博士を恥さゝせ
文ゝ陌(チマタ)に大鈴(ロリン)する 杖

ひエむ楚国は芙蓉姿 和泉
名髪あまて恋は喪に入
執に手球尚し解さん見ぬをて
六月(ミナツキ)この水の寒さはうたき
銀治桶師都うたしに連ら生く
三ッ子は恥をはうれなる
舜の代乃え日球るも志を執り
あわれまく志とれあはれなし

小雨から笠の外書道をから
留守に嗅えし鮫取ら旅
二度か入る丁から走の縁先けく
佐くしの墨に眉うるくめるれ
玉筆
其頃くおぼろ社杉ほろ取る
壁の灯ほそく水寂も風趣
毋負て旅の色と世を思ひ
身匠の幸に休まくと泣

鳥の音いふて斑鳩(イカルカ)た啼はうて
さびしき煙ゑそいくそち
加第(ヨワヒワ子)たてよへなくの綾(アヤ)にしき
桜おとしの武者は悪初
佳ろ文訂の析文字あかれなる
字治の右京のとちあ川九月
三尺の桃ふところにれ入らく
勘半をゆるん基たる所よ

伽羅佛の名利乃悪世に栄
唐楠乃若流甚の聖なる
行かしゝ仮の寐人殺負く
松明に来ぬる生霧の蔓(ツル)
包の身錢枕に墟乃菱一杯
四沢にゞ流る曲水のみ

ひさゝ、
あら露もゆつて鴫の羽音うるし
雨もほろゝ有もあ乱等
唐秦の背中に仲ぬる浴して
象てくいうるのきのんなりけり
意志も喜の寿歓天家お
梅提下行大内の冬

献立の先一献そうちはさし
勝手の方越かゝる御立
萱葺の侍学同士袖ぬらさく
まろね良して待る月
鈴むしに馬追虫も啼やらん
楠いられみよし野の秋
小きに百両包まれほどき
力なき手にまつる人参

世語しなや去し金遣を澀(アテ)の者
巣の子雀の追くに走つ
はくふにかつ忘るも老さくら
舟に思ふ角うつなこ
うかしく呪ふの余を又られる
負れにてけの定をうれくし
みつくらふはられ一種に小盃
女さかこハ三十路こえ

七

我悪きよ我へよ人を嫌ふく
愛は鏡ま加ほ曇らさんしれ
かしら剃し外観さしに威をうつて
詩を詠る濱の立合
風の中より身ならはあふ宿
捨て家子を拾ふ尼寺
出家師大巖茶の氏古く
月おくれ汁講の餅

ナウ
青き清く秋垣かゝ風水のもと
昨日しれの雀遊ふこゆ
中〳〵に賢き人の愚なく
内から錠をおろしたおけた
天か下花はなかれるも取し
鯛はさくらの名あるなり宿

猿蓑、

杉菴や鄭みをむにも來て一庭

分根杜丹のはなをれなほ花

群るゝ觜のいすゝを餌拾ひて

嵐もし雲をあらくたに妻

身のある馬士のゝめのるさに郎て

なまく握風と下の絲

野送りの調度大才採ひ帯刀

男れ氣をさらゆみよう兒ん

萬所の様綵小唄板吉かられ

幣乃使れ道しと戀

人毎ま末の松山偽りて

よくも衝(かと)さるを有為の月

ほうしと汲れく床ま二丁弱丹

生れうしある蛸市の豬

奉ニみちて下部の名を付し
きのふ寒けれ杈そてしなれ
世の中ハ秋かしはましの花の宮
荒し館の茎　咲残て
信成そ待ゑなうら風呂焚て
蔦翁ゐさへ松そき山里
鞠桶ニ鳥のかよふ店の先
精進ニ神仏ハ人の親

愛て出家娘を従ふ成　絡
髪ハ切てもまたのびるもの
古ぬの宮殿ニ隠宮と偉つり
確て掠正　舟乃錦
かゝる飯なしみの牛を書入て
あるまぬ内そし　死人もよし
来しに良夜といつて思ひかち
茅萱紙巾ニ二の神子ら家

ゆふみ形作て杉ほとし嵯峨人形
油さしつれ夕ァわかれしか
志はおらやをやこともらしを雨ふ花
尾居て帰来のうつらふ
錦見る心えに変れ昔衣
春ハうれ世ふ変ふ真ゝ中

すゝ儀、
こほろひに枯すなるか　枯尾花
年近の志くれにぬれし猶も
橋夢借仕色仕事に松明焚て
菜を音をあらし　荒弱
とんこまか兎有こ流の風　晏
四序蒲猫の数ふさくれハ

秋の雲斗が横わたし
ひとこと口利く津軽山伏
お慈悲に小袖の流る居酒店
今に見が肺気ぶ声
よみ安くかな法けある普門品
松足なしにくゝま梅雨空
夜が有雛は巣籠を汚とかさね
待うせ哉吹ゑて風鐸流

茶話に大坂陣がそらおほえ
踊付してもふれ甲子
肴絲て辛栗にくゝれ花藤蔓
挽細にも芽かを早蕨
古代て十日居すしむぬか寺
搗てつんほと書てくれきり
勘定のすみハ枚食卓とうかく記
水売るに哉見ける本縁起

請合ふてみるに雨ハ降出し
そらし晴てもさわく波葉
本樸拒儀の識を立て
むかしの状ハ二度祭りまれ
明楚のお旋めく隆又月見
之圍ハ作まま風もぬ藪
阿ともたまへなるむしく縁も
伯父かおうまてにしてまする

十ウ
立作可まえても忘るく小服さし
衣ゆう杙くる宜翁扶舟
姑のよい様か宗旨にうちこく
汁の気を残田乐まやく
花さかを八十八夜を千年理
筆まるやられ水　素あむ
吟

国立国会図書館　タイトル『俳諧雪とすみ』 請求記号 863-133
ガラス使用

863
133

文政四年巳春

俳仙堂之雅摺畫

俳僊堂蔵版

14169

国立国会図書館　タイトル『俳諧雪とすみ』 請求記号 863-133

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『俳諧雪とすみ』 請求記号 863-133
ガラス使用